

# 政党システム変化の分析枠組み

荒 井 祐 介

- 1 はじめに
- 2 政党システムの安定と変化
- 3 システムとしての政党システム
- 4 政党システムの特徴
- 5 政党システム変化の測定
- 6 政党システムに影響を及ぼす要因
- 7 おわりに

## 1 はじめに

本稿では、これまでに蓄積されてきた政党システムに関する業績を踏まえたうえで、暫定的なものに留まるとはいえ、政党システム変化の体系的な分析枠組みを素描することを試みる。最初に、政党システムの安定と変化をめぐる議論を概観し、現在の政党システム研究の状況を確認する。その上で、政党システム概念の説明を行う。概念規定を明確に行わなければ、そもそも何について論じているのかも曖昧なものになってしまう。政党システム変化を論じる際には、政党システムの基礎概念であるシステム概念をきちんと踏まえておくことが重要である。次いで、政党システム変化とは、何が、どのように／どの程度変化することなのか、という点を議論する。そして最後に、政党システム変化がなぜ起こるのか、すなわち政党間競合の關係に直接的・間接的に影響を与える要因について検討を加える。

## 2 政党システムの安定と変化

今日の西欧政党システムに関する議論は、矛盾する主張の不協和音によって特徴づけられる (Kitschelt 1997)。すなわち、一方には、政党システムの不安定性ないし変化を強調する議論があり、他方には、政党システムの安定性ないし持続性を強調する議論がある。

政党システムの変化を強調する議論の多くは、リップセット (Syemour Martin Lipset) とロッキン (Stein Rokkan) の凍結仮説 (Lipset and Rokkan 1967)、およびそれを実証的に再確認したローズ (Richard Rose) とアーウィン (Dereck Urwin) の研究 (Rose and Urwin 1970) への挑戦というかたちをとっている。そこで、まず、リップセットとロッキンの議論を概観した上で、政党システムの不安定性を強調する議論と安定性を強調する議論のいくつかを取り上げよう。

リップセットとロッキンによれば、現代の西欧諸国の政党システムは、西欧の政治発展過程で発生した2つの革命に起因する4つの亀裂 (cleavage) から大きな影響を受けている (Lipset and Rokkan 1967)。

まず、国民国家建設をめぐる「国民革命」によって、(1)中心的な国民形成文化と、州や周辺部における民族的・言語的・宗教的に異なる従属的な人々の漸進的な抵抗との間の紛争 (中心-周辺)、そして(2)中央集権化・標準化・動員化された国民国家と、歴史的に確立された教会の団体特権との間の紛争 (国家-教会) がもたらされた。さらに、「産業革命」によって、(3)地主利益と台頭しつつある産業事業家階級との間の紛争 (地主-産業)、そして(4)所有者・雇用者と賃借人・労働者・工員との間での紛争 (雇用者-労働者) がもたらされた。

これら4つの亀裂は、そのまま単純に政党間の対立構造へと変換されるわけではない。そこでは、当然ながら、各国におけるエリートおよび反対派集団の組織的發展、敵対・同盟をめぐる戦略、制度的環境の違いによって、さまざまなヴァリエーションが見出される。この変換過程のヴァリエーションを説明するために、リップセットとロッキン

は、各社会における抗議表明および利益代表の条件という観点から、政治システムの中で新たな要求を押し出す運動が通過する4つの敷居を指摘している。

第1に、正統性 (legitimation) の敷居である。あらゆる抗議が謀議として抑圧されるのか、それとも請願・批判・対抗の権利がいくらかでも承認されているのか。第2に、編入 (incorporation) の敷居である。運動の支持者は、議員選出過程への参加を拒否されているのか、それとも支配者層と同等の政治的市民権を与えられているのか。第3に、代表 (representation) の敷居である。新たな運動が代表機関へのアクセスを確実なものとするためには、伝統的で巨大な運動と協力しなければならないのか、それとも独力で代表を獲得することが可能なのか。第4に、多数派権力 (majority power) の敷居である。体制内には多数決原理に対する内在的な抑制や反対勢力が存在しているのか。あるいは、選挙に勝利した政党ないし同盟には、主要な体制構造改革を断行し得る権力が付与されるのか。社会的亀裂の政党間対立構造への変換過程は、これら4つの敷居の高低に大きな影響を及ぼされるのである。

現代の西欧政党システムは、中心—周辺、国家—教会、地主—産業、雇用者—労働者という4つの亀裂に沿った集団的対抗関係が、抗議表明と利益代表に関する4つの敷居を通過していくなかで形成されていった。こうして形成された政党システムにとって、普通選挙権の拡大と大衆政党 (mass party) の登場は決定的に重要である。

選挙権が拡大され潜在的支持者の新たな貯水池の主要部門が動員されるなかで、大衆政党は、有権者を部門別に囲い込み、強固で持続的な政治的アイデンティティを植えつけた。そうすることによって大衆政党は、選挙民の政治行動を構造化し、党派的安全性を確実なものとしていった (Mair 1990: 3)。リプセットとロッキンによれば、「大衆政党の成長がもたらす『支持市場』の縮小化は、明らかに、新たな運動体が参入するための余地を奪い」、「主要な政党選択肢は凍結された」のである (Lipset and Rokkan 1967: 50-51)。

普通選挙権の拡大による選挙過程への市民の動員、そして大衆政党の組織的成長にともなう支持市場の縮小化は、西欧では1920年代頃に完了したとされる。ここから、「1960年代の政党システムは、いくつかの重要な例外を除けば、1920年代の亀裂構造を反映している」という有名な主張が導き出される (Lipset and Rokkan 1967: 50)。

ローズとアーウィン<sup>1</sup>は、第2次世界大戦後の西欧諸国の選挙データをより詳しく検討し、リップセットとロッカンの主張を再確認している。

戦後における西欧諸国のほとんどの政党の選挙での強さは、選挙毎でも、10年毎でも、あるいはある世代の一生のなかで見ても、ほとんど変化していない。……要するに、1945年以降の政党および政党システムの発展に関心をもつ社会学者にとっての最優先事項は、変動期の政治史における変化の欠如を説明することである (Rose and Urwin 1970: 295)。

ところが、1970年代後半以降になると、もはや今日の西欧政党システムは安定していないと主張する議論が数多くあらわれてきた。これらの議論は、社会構造の変容、有権者の投票行動の変化、新政党の参入、既存政党の選挙での衰退、政党と有権者の紐帯の弱体化などを指摘し、かつてリップセットとロッカンの「凍結」と表現した西欧政党システムの安定性はもはや過去のものになったと主張する。

たとえば、ペデルセン (Mogens Pedersen) は、1945年から1977年までに西欧13ヶ国で行われた127の選挙を対象として選挙ヴォラティリティ (electoral volatility) を測定し、その変化の傾向を分析した (Pedersen 1979, 1983)。ペデルセンによれば、ローズとアーウィンの主張は、1970年の時点では適切なものであったが、1970年代末の時点では、一定の制限を設けざるを得ないという。すなわち、「1970年代末における最優先事項は、依然として安定している政党システムが存在している一方で、他の政党システムが変化過程にあたり著しく不安定

な時期を経験した理由を理解することである」(Pedersen 1983: 43)。

エアソン (Svante Ersson) とラネ (Jan-Erik Lane) もまた、西欧諸国における有権者の投票行動の変化から、リプセット＝ロッキン・モデルの妥当性を検討している (Ersson and Lane 1998)。彼らによれば、リプセットとロッキンの凍結仮説というのは、(1)選挙での支持を見ると、政党は長期にわたって安定している (政党システムに関するマクロ・レベルの仮説)、(2)政党システムとの関連において、有権者は亀裂を背景として凍結されている (有権者に関する個人レベルの仮説) という2つの仮説を含んでいるという。そして第2仮説は第1仮説の解釈であるとされ、第2仮説が妥当しなければ、政党の足元にある敷物が引き取られることになり、第1仮説の根拠がぐらつくことになる。

エアソンとラネは、さまざまなヴォラティリティ指標を用いて調査し、西欧の有権者の不安定性が長期的に上昇していることを明らかにした。そして彼らは、「いくつかのケースでは、もはや有権者はロッキン流のメカニズム、すなわち社会的亀裂によって政党に結びつけられているということではなく」、「今日の現実からすれば、リプセット＝ロッキン・モデルは放棄すべきものである」と論じた (Ersson and Lane 1998: 36)。

ダルトン (Russell Dalton)、フラナガン (Scott Flanagan)、ベック (Paul Allen Beck) は、政党支持の長期的基盤と政党に対する忠誠心という点から、有権者編成の状態を安定的編成 (stable alignment)、再編成 (realignment)、脱編成 (dealignment) に区別し、今日の先進民主主義国の有権者編成について検討を加えた。その結果、調査したほとんどの国で、再編成ないし脱編成の証拠が見出されたという。すなわち、日本、西ドイツ、イタリアでは再編成過程が顕著であり、オランダ、イギリス、スカンジナビア諸国、スペインでは脱編成のパターンを辿っているという (Dalton, Flanagan, and Beck 1984, Dalton, Beck, and Flanagan 1984)。

いずれの編成状態にあっても有権者は流動状態にあるが、(1)安定的

編成期には、個々の政党の長期的支持基盤や支持者の党派的忠誠心に変化はなく、いわば動的均衡の状態が成立している。(2)再編成期には、それまで政党との結び付きをもたなかった有権者が政党と結び付いたり、ある政党に忠誠心をもっていた有権者が他の政党と結び付いたりすることで、政党連合の構成に重大な変化をもたらされる。要するに、政党支持の源泉が変化し、各政党の得票率も変化するが、政党と有権者の結び付きは（以前とは異なるかたちであっても）まだ見られるのが再編成の時期である。(3)脱編成期には、伝統的な政党連合が分解してしまうほどに政党との結び付きをもつ有権者の割合が減少する、すなわち政党支持の大衆的基盤が衰退する (Dalton, Beck, and Flanagan 1984: 11-15)。

亀裂との関連で言えば、安定的編成は、既存の亀裂構造がほとんど変化せずに残存している状態であり、再編成は、既存の亀裂が弱くなるかわりに新しい亀裂が発生している状態であり、脱編成は、既存の亀裂が完全に衰退して新しい亀裂も発生していない状態である (Webb 2002: 118-119)。

ダルトンらもまた、ペデルセンやエアソン&ラネと同様に、リップセット=ロッキン・モデルの今日的妥当性に異議を申し立てている。

要するに、民主主義国において我々の寿命と同じくらい長く凍結していた政党システムの構造が次第に解凍し始めている兆候を目撃できるのである。すでに、いくつかのニュー・ポリティクス・グループが選挙に参加し、議席を獲得している。彼らはまだ少数派ではあるが、その政治的インパクトは増大しつつある。民主主義諸国が真の脱工業社会に近づくにつれて、この変化の力は、党派的編成の新たな基盤を生み出すのに十分なものとなるかもしれない (Dalton, Flanagan, and Beck 1984: 459-460)。

このような西欧政党システムの変化を強調する議論に対して、それらの議論で証拠として列挙されている変化の意味を検討し、逆に政党システムの安定性や持続性を主張する議論もある。

「システムとしての政党システム」という視点を重視するスミス (Gordon Smith) によれば、政党数の増大、個々の政党支持の長期的変動、政党のイデオロギーや戦略の変化などが重大な意味をもつ可能性を認めながらも、それらの変化は政党間の相互作用については直接的には何も語ってはいないという (Smith 1989: 349)。また実際のところ、西欧の政党システムは変化したとはいえ、その変化の度合いは予想よりも抑えられたものであり、当初考えられていたよりも本質的なものではなかった可能性も指摘している (Smith 1990: 157)。

メア (Peter Mair) は、政党システムの不安定性を強調する議論に対して広範に反論している (Mair 1990, 1997: 45-75)。メアが問題にするのは、選挙変化 (electoral change) と政党システム変化の関係性である。

まず、選挙変化が政党システム変化につながるという直接的な論法については (選挙変化=政党システム変化)、必ずしもそうとは限らない点を指摘する。選挙変化は政党システム変化に結び付くこともあるが、そうならないこともある。ここで重要なのは、選挙変化が政党間の相互作用の本質に影響を及ぼすか否かである。たとえば、わずかな選挙変化であっても、政党間競争の方向性や政権形成のパターンに変化をもたらしたとすれば、それは政党システム変化につながると見なすことができる。逆に、選挙変化の度合いが大きい場合でも、政党間競争の方向性や政権形成のパターンに本質的な変化をもたらさないときには、それは政党システム変化につながるとは見なすことができない。

さらに「選挙変化=亀裂構造の変化=政党システム変化」という間接的な論法、すなわち、選挙変化は亀裂構造の変化の兆候であり、それゆえ政党システム変化を意味するという論法についても、メアはいくつかの問題点を指摘している。

「亀裂構造の変化=政党システム変化」という後者のリンクについて

は、亀裂構造を政党システムの特徴と見なすことができるか否かが問題になる。この点について、スミスは次のように明確に指摘している。

そもそも社会的亀裂はシステムに関係する性質 (systemic qualities) をもっているのだろうか。亀裂構造は、有権者編成を形成する一組の要因として、各政党の支持の社会的構成 (social make-up) に関係するが、相互作用という定義に従うならば、「システム」に関係するものではない。社会的亀裂とその変化は、明らかに、全体としてのシステムに重要な帰結をもたらすが、それらの効果は個々の政党を通じて現れるのであり、他の諸次元——政党の数と規模、分極化の程度・強度、政党システムのヴォラティリティ——によって表現される (Smith 1989: 351)。

次に、「有権者変化＝亀裂構造の変化」という前者のリンクについてであるが、まず、有権者変化を強調する議論で使用される選挙のアグリゲート・データの調査期間の問題点が指摘される。多くの研究では、西欧の有権者編成は1950年代および60年代には安定していたが、70年代から80年代の選挙結果を調査すると明らかに不安定になっており、それゆえリブセットとロックンの凍結仮説は棄却すべきであると論じている。しかしながら、調査期間を拡大し、1920年代以降の選挙に関するより長期的なアグリゲート・データを検討すると、1920年代および30年代の選挙もまた、高いヴォラティリティ値を示していたことがわかる。この結果から考えると、説明を要するような例外的な時期は、1970年代および80年代の不安定な時期ではなく、むしろ50年代および60年代の安定していた時期だということになる。つまり、西欧の政党システムは決して安定などしていなかったのであり、凍結という表現は誇大表現であったということになる。ここで重要なことは、リブセットとロックンの凍結仮説の妥当性を問うことではなく、むしろ有

権者変化を主張する議論が矛盾を抱えている点にある。

さらにメアは、「有権者変化＝亀裂構造の変化」という主張が抱えるもう1つの問題点を指摘する。有権者変化を亀裂構造の変化と主張するほとんどの議論は、いかなる指標を用いていようとも、結局のところ、「個々の政党のアグリゲートな支持の持続／変化の測定に基礎を置いている」(Mair 1997: 64)。つまり、そこでは1つの政党と1つの亀裂との相関関係が仮定されている。しかし、この仮定は明らかに不適切である。というのは、決定的な亀裂である階級間亀裂は、個々の政党ではなくむしろ諸政党の「ブロック」、すなわち社会主義政党・共産主義政党のブロックとキリスト教主義政党・リベラル政党のブロックとを分ける境界線だからである。

個々の政党レベルにおける変化を測定した場合、広範な亀裂に沿った編成という問題を無視することになり、ブロック内での変化とブロック間での変化とを区別することが不可能になる。それゆえ、これらの基準は、亀裂構造の持続性に関する指標としては全く不適当なものであると理解されねばならない。

実際に、亀裂を横断して発生する選挙ヴォラティリティと、各亀裂ブロック内における選挙ヴォラティリティとを区別するならば、1970年代および80年代の選挙での不安定性はむしろ抑制されていたことが明らかとなる。この点は、とくに階級間亀裂に妥当する。各階級ブロック内での有権者の交換や不安定性が長期的に増している一方で、亀裂を横断する有権者の交換というレベルにおいては、事実上の長期的「衰退」が見られるのである (Bartolini and Mair 1990)。

このように、政党システムの変化と持続をめぐることは、さまざまな論者がそれぞれの視点から研究を行ってきており、一定の共通理解も生まれているが、政党システムが安定しているのか、それとも変化しつつあるのかという点については、明確なスタンスの違いが存在する。もちろん、どちらかの主張が正しくて、どちらかの主張が間違っているというものではない。

これらの議論を通して浮かび上がってくるのは、政党システム変化に関して研究者間で幅広い合意を得ている体系的な分析枠組みが存在しないということである。ここでいう政党システム変化の体系的な分析枠組みとは、政党システムの何が、どのように／どの程度、そしてなぜ変化したのか（あるいは変化しなかったのか）を総体的に提示しうる分析枠組みである。

次節以降では、政党システムの体系的な分析枠組みを素描することを試みる。まず、政党システムとは何であるのかという点から検討を加えよう。

### 3 システムとしての政党システム

政党システム概念は、当然ながら、システム概念を基礎にしている。システムは、抽象的な定義で言えば、「相互作用している諸要素の複合体」(Bertalanffy 1968)、あるいは「対象間の関係と対象の属性間の関係を含む、諸対象のセット」(Hall and Fagen 1956: 18)と表現される。ここで「要素」(element)あるいは「対象」(object)と表現されているのは、システムを構成する最小単位のもののものであり、この他にも「部分」(part)や「成分」(component)などの用語があてられることもある。

研究者の多くは、このシステム概念を踏まえて、政党システムを定義づけている。すなわち、政党システムを構成する最小単位を政党とし、政党システムを、「政党間の諸関係の全体に関するもの」(Smith 1989: 349)、「政党間競合から生まれる相互作用のシステム」(Sartori 1976: 44)、「政党間の競合と協調のパターン」(Ware 1996: 7)などと定義づけている。ラネとエアソンによれば、このような政党システムの基本的な定義（最小限定義）については、研究者間に合意が存在するという(Lane and Ersson 1994: 175)。

抽象的な定義は、簡潔に表現される一方で、その定義の前提部分や含意が見えてこない。そこで、システム概念の含意について、北原(1985)、伊藤(1987)、小林(2007)を参考に、もう少し詳しく検討して

おこう（他に Bertalanffy 1968, 山川 1968, 谷藤 1985, 江上 1985）。

まず、システムは(1)いつかの要素を含んでおり、(2)それらの要素が相互に関連性を保持している。全体的観点から見た要素の相互関係をシステムの構造 (structure) ないしパターンと呼び、ある一定の仕事をするための動的構造をメカニズム (mechanism) と呼ぶ。システムは、(3)ある種類・量の入力を受け入れ、そのシステム固有の性質にもとづいて、ある種類・量の出力に変換する。記号で表現するならば、次のようになる。ここで、 $y$  は出力、 $x$  は入力、 $T$  は変換オペレータを表わす。この変換オペレータは、機能 (function) と表現してもよい。

$$y = T \cdot x$$

複数の要素を含み、それらの要素が相互作用しているものをシステムと規定するとき、そこではある諸要素を他の諸要素から区別する作業、すなわちシステムと環境との境界線を引くという作業が行われることになる。もちろん、社会科学が対象とする事象の場合、ある要素は、システム内の要素とのみ相互関連性をもつということは稀であって、システムの外側にある多くの要素とも相互関連性を有している。

ここで重要な点は、システムに含まれる諸要素は、「ある性質に関して相互関連している」ということである。システムとは、どのような観察・研究の対象として規定されるかに依存するものであり、その意味で、主体が客体を認識する概念構成物といえる。つまり、観察者が、経験的・主観的にシステムの性質を設定した上で、その性質に基づいてあらゆる要素の集合を二分し、システム要素の集合としてのシステムと、それ以外の要素の集合としての環境とを概念的に構成するのである。当然ながら、システムの性質が何であるのか、そしてどのような基準に基づいてシステムと環境とを切断するのかについては、意見の対立が発生することも多い。

システムはまた、「全体は部分の総和以上のものである」と表現され

るように、(4)構成要素の相互作用を通じて、要素固有の性質からは導き出せない効果・特性を創発する。このことは、システムを分解して得られた要素を個別に調べ、それらを積み上げても、システムの特徴が明らかになるとは限らないことを意味する。

デカルト哲学に源流をもつ近代科学方法論（機械論的自然観）では、複雑な対象を単純な構成要素に分解して調べ、それらを加算することで全体を解明できるという要素還元主義の立場をとっていた。加算性の条件が成立するためには、第1に、要素間に相互作用がないか、あるいは無視できる、第2に、部分のふるまいを記述する関係が線形でなければならない。しかし、我々が対象とする人間活動システムや社会システムにおいては、要素間の相互作用は無数に存在し、要素のふるまいも相互作用の影響によって非線形となる。それゆえ、システム論では、全体は部分に還元不可能（非還元主義）という立場から、相互関係性に導かれた非加算的システム特有の全体と秩序が存在すると認識する。

さらに、システム構成要素とシステム全体との関係を考えた場合、(5)要素の相互作用から全体が形成されるとともに、全体もまた要素に影響を及ぼしており、要素と全体の相互浸透が繰り返されることによって、秩序形成がなされる（小林 2007）。

要素と全体は密接不可分な関係にあり、全体のなかに要素が含まれると同時に、要素のなかに全体が含まれている。ある要素の変化は他の要素を変化させ、それによって要素の相互関係に影響を受け、システム全体も何らかの変化をする。そして、システム全体の変化は、要素の相互関係に影響を及ぼし、さらには個々の要素にも影響を及ぼす。その意味で、全体はどこまでも要素に依存しており、要素がなくなれば全体は崩壊する。そして部分もまたどこまでも全体に依存しており、全体が崩壊すれば要素は意味をもたなくなるのである。

こうした要素と全体の関係性を内包しつつ、システムは(6)適応的自己安定化と適応的自己組織化を実現している。システムは、過去から

現在までの進化、発展、学習の結果として産出され秩序化された全体のパターンを維持しようとする。そこでは、環境からのさまざまな入力に対して、自らの構造・機能の一定状態を維持するために、その状態や行動に見られる逸脱を打ち消したり、部分的な順応的適応が行われる。すなわち、環境から入力される情報に対して、制御と適応というネガティブ・フィードバックを通じた自己維持が図られるのである（いわゆるファースト・サイバネティクス）。

さらにシステムは、自己維持を図るだけでなく、現在から未来にかかわる新たな秩序状態を再編するという側面も有する。システムは、内的・外的な攪乱を抑えがたく現在の定常状態の維持が困難な場合には、自らの構造・機能の編成替えをすることによって新たに安定状態をつくり出していく。システムは、環境に適応して柔軟に自己を再組織化し、自らを変革していく能力をもつ。すなわち、環境からの情報による定常状態からの逸脱を増幅させるポジティブ・フィードバックを通じた適応的自己組織化が図られるのである（いわゆるセカンド・サイバネティクス）。

それと同時に、システムは、(7)適応的自己安定化・自己組織化によって、積極的に環境を形成し創造してもいく。システムは、環境に対して受動的に適応すると同時に、環境に対して能動的に働きかけ、環境をつくりかえてもいく。

最後に、システムは、(8)内部にサブシステムをもつ複合システムとして理解される。一般的にシステムは、複数のサブシステムから構成されている。これらのサブシステムもまたシステムであるから、ある性質に関する構成要素の相互作用から成る構造をもち、そのサブシステム内外の環境から新たな情報を受容し、適応的自己維持・自己形成を行っている。複合システムとは、これら複数のサブシステムが独自の自由度や特性をもちながら互いに有機的に結合し、そこに全体として新たな効果・性質を創発していると考えられることができる。

ここまで、とくに社会的システムを念頭にシステム概念のもつ含意

を概観してきたが、政党システムもシステムの一つである以上、これらの含意を踏まえることが重要となる。政党システム研究において最も明確にシステム概念を意識しているのは、サルトーリ (Giovanni Sartori) である (Sartori 1976)。

サルトーリによれば、政党システム研究においては、システム分析本来の全必要条件に従うことなく政党システムを論じることが許されているとはいえ、少なくとも2つの条件を充たさなければ、システム概念は意味をもたなくなるという。すなわち、システムは、(1)構成要素の個別的考察とは異なる特性 (properties) を示し、さらに(2)構成要素のパターン化された相互作用を内包し、それから生まれてくるという条件である。その上で、サルトーリは、政党システムとは「政党間競合から生まれる相互作用のシステム」であり、「複数政党相互間の関連性、各党が他の政党の関数である方法、および各党が他の政党に対応する方法 (競合的対応かそれともそれ以外の方法か)」に関するものと述べている (Sartori 1976: 43-44; 邦訳 75-76)

すでに指摘したように、政党システムは政党間相互作用のシステムであり、それらの政党間相互作用——政党システムの諸特性 (party-system properties) と呼ばれる——によって描写されるという点については、研究者間に合意が存在している (Lane and Ersson 1994: 175)。ところが、そこから一步進んで、政党システムを形成する政党間相互作用が具体的には何であるのか、すなわち政党システムの諸特性とは何かという議論になると、合意は崩壊してしまう。

政党システムに関する議論の不協和音の多くは、この点に起因しているように思われる。政党システム変化を政党間相互作用の構造の変化であると定義づけても、その相互作用の構造が何であるかは論者によって異なっているのである。とはいえ、システム構成要素を括る「ある性質」が観察者の経験的・主観的判断に委ねられている以上、この問題を解消することは容易ではない。

そこで、本稿では、政党システムの諸特性を厳密に確定する方向に

進むのではなく、これまでに提起されたさまざまな諸特性を取り上げることとする。政党システムの諸特性のヴァリエーションとその測定方法を確認した上で、次に、政党システム変化をどのように測定するのかという問題を検討する。そこでは、政党システムのタイポロジーやシステム変化のレベルを取り上げることになるだろう。

#### 4 政党システムの特性

政党システムの特性については、これまでに数多くの指標が提出されてきた。全ての指標を取り上げることはできないが、多くの研究者が言及しているものについて概観しよう。

ペデルセンが指摘したように (Pedersen 1983: 31)、政党間競合は概念的に異なる複数の次元で展開されており、それらを政党システム内で相互作用するサブシステムと理解することもできる。政党が国家と社会の中間に位置し、両者を架橋する橋あるいは媒介者としての機能を果たしていることを考えると、政党間競合（すなわち政党システムの特性）を選挙次元 (electoral dimension) で展開されるものと政権次元 (governmental dimension) で展開されるものと分けることができる。本稿では、選挙次元に属する政党システムの特性として、(1)政党数、(2)破片化、(3)非対称性、(4)ヴォラティリティを取り上げ、政権次元に属する特性として、(5)分極化、(6)分節化、(7)政権形成パターンを取り上げよう。

##### (1) 政党数

政党システムの特性としてまず挙げられるのは、政党の数である。単純な数え方としては、政治システム内に存在している政党を全て数える方法や、選挙に参加している政党を全て数える方法、あるいは議席を獲得した政党を全て数えるという方法がある。しかし、これらの方法ではシステムにとって意味のある政党だけでなく、ほとんど意味のない政党も含むことになり、政党システムの本質的特性を捉え損ね

る可能性がある。そこで、何らかの計算ルールが必要となる。

政党の数を数える際には、たとえば、有効得票の5%以上を獲得している政党を数えたり、議席率で5%を超える政党を数えるなど、何らかの数的基準を機械的に当てはめる方法がある。このような数的基準を適用する場合でも、その数値が低すぎる場合には有意ではない政党が多く含まれることになり、逆に数値が高すぎる場合には有意な小政党を排除するという問題が起きるかもしれない。

サルトーリは、政党の有意性は政党の勢力規模だけでなく位置価値によっても左右されると指摘し、有意政党を数えるための2つの計算ルールを提案する (Sartori 1976: 邦訳 211-218)。

第1に、連合形成の可能性 (coalition potential) の有無である。すなわち、「長期にわたって不必要な小党 (実現可能な過半数連合から必要と評価されておらず、加入を要請されることもない党) は優位性のない党として無視できる。逆に、どんなに党勢が小さくとも、どうしても計算に入れねばならない小党もある。たとえば、過半数与党を作り上げるさまざまな組合せのうち、少なくとも1つのパターンを決定する位置を長期にわたって、また、ある時点で、享受している場合には、その小党は、当然、計算の対象になる」 (Sartori 1976: 邦訳 213-214)。

第2に、脅迫の可能性 (blackmail potential) の有無である。すなわち、「存在そのものによって政党間競合の戦術に影響を与えることのできる政党は考察・計算の対象となる。特に、政権指向政党が繰り広げる競合の方向を変更するだけの力を持つ政党は、当然ながら、考察・計算の対象となる」 (Sartori 1976: 邦訳 214)。

## (2) 破片化

数的基準以下の政党を排除する (逆に言えば基準以上の政党全てを包含する) 方法やサルトーリの計算ルールでは、基準を満たした政党は値としては全て等価に扱われることになる。それに対して、システム内に含まれる政党の数と、得票率や議席率で示される政党の相対的規模を

組み合わせて、システムの破片化度を計算する方法もある。

前者の計算方法では、システムを構成する複数の破片の大きさを均一のものに見なすが、後者の計算方法では、それらの破片の大きさがバラバラであることを考慮しつつ、システム全体の破片化の程度を測定しようとするのである。

政党システムの破片化を測る指標にはさまざまなものが開発されているが (Wildgen 1971, Flanagan 1971, Mayer 1972, Milder 1974, Mayer 1980, Molinar 1991)、ここでは相対的に利用頻度が高い、レイ (Douglas Rae) の破片化指数 (index of fractionalization)、およびラークソー (Markku Laakso) とターゲペラ (Rein Taagepera) の有効政党数 (effective number of parties) という指標を取り上げよう (Rae 1968, Laakso and Taagepera 1979)。

破片化指数 ( $F$ ) は、各党の得票率 (あるいは議席率) を 2 乗して足し合わせ、1 からそれを引くことで求められる。計算式は以下のように表わされる。ここで、 $p_i$  は  $i$  番目の政党の得票率 (あるいは議席率)、 $n$  は政党数を表わす。

$$F=1-\sum_{i=1}^n p_i^2$$

たとえば、2つの政党が 50% ずつ得票している場合は、 $1-0.5^2+0.5^2=0.50$ 、3つの政党が 33% ずつ得票している場合は  $1-0.33^2+0.33^2+0.33^2=0.67$  となる。3つの政党が 45%、45%、10% という得票の場合には  $1-0.45^2+0.45^2+0.1^2=0.59$  となる。

有効政党数 ( $N$ ) は、破片化指数と同じ現象を表わすものであるが (実際に破片化指数から簡単に計算できる)、直感的に政党数を把握できるのでより利用しやすいものである。数式で表わすと以下のようなになる。

$$N=\frac{1}{(1-F)}$$

あるいは

$$N = \frac{1}{\sum_{i=1}^n p_i^2}$$

たとえば、2つの政党が50%ずつ得票している場合は、 $1/0.5^2 + 0.5^2 = 2.00$ 、3つの政党が33%ずつ得票している場合は $1/0.33^2 + 0.33^2 + 0.33^2 = 3.06$ となる。3つの政党が45%、45%、10%という得票の場合には $1/0.45^2 + 0.45^2 + 0.1^2 = 2.40$ となる。

### (3) 非対称性

破片化度は政党システム内の全ての政党とその相対的規模を考慮にいれているが、全政党の相対的規模だけでなく2大政党の相対的規模の情報を使用することが適切な場合もある。民主主義が政権交代のシステムであると見なされているとき、政権を獲得する機会の同等性は極めて重要になる。この意味での非同等性の程度は、2大政党の得票率の差異から判断される政党システムの非対称性 (asymmetry) によって測定される。それは以下のように表わすことができる (Niedermayer 1996: 24-25)。

$$A = p_a - p_b$$

ここで、 $p_a$  は2大政党のうち一方の政党の得票率を、 $p_b$  は他方の政党の得票率を表わす。非対称性の数値範囲は-100から+100までとなる。2大政党間の勢力変化を時系列的に測定できるように、数値の絶対数化はしない。

### (4) ヴォラティリティ

破片化と非対称性の指標はいずれも、ある特定の時点における政党

システムの状態を示すものである。それに対して、時間的に異なる2つの時点の状態変化を測定する指標も開発されている。そのような指標として、有権者の投票行動変化を通じた政党の勢力規模の変動を測定するさまざまな指標が開発されているが (Hawks 1969, Miller 1972, Ascher and Tarrow 1975, Przeworski 1975, Borre 1980)、ここではペデルセンのヴォラティリティを取り上げよう (Pedersen 1979)。

ヴォラティリティは、2回の連続する選挙の間での正味の有権者変化として定義され、変化現象に直接言及するものであるが、その帰結を示すものではない。その測定方法は、ある選挙 ( $t$ ) と前回選挙 ( $t-1$ ) の各党の得票率の変動を足し合わせ、それを2で割ることによって求められる。あるいはもっと単純に、ある選挙と前回選挙とを比べて得票率を伸ばした全政党の得票率増加分を合計することでも求められる。ヴォラティリティの計算方法は以下のように表わせる。

$t$  回目の選挙の政党  $i$  の得票率を  $p_{i,t}$  とすると、政党  $i$  の前回選挙からの勢力変化は、

$$\Delta p_{i,t} = p_{i,t} - p_{i,t-1}$$

となる。このとき、2回の選挙における変化の合計 (total net change) は次のように表わせる。 $n$  は2回の選挙で競合する政党の数を表わす。

$$TNC_t = \sum_{i=1}^n |\Delta p_{i,t}|$$

$$0 \leq TNC_t \leq 200$$

正味の有権者変化であるヴォラティリティは、 $TNC_t$  に  $1/2$  を乗ずることで求められる。

$$V_t = 1/2 \times \sum_{i=1}^n |\Delta p_{i,t}|$$

$$0 \leq V_t \leq 100$$

### (5) 分極化

政党システムの特徴として次に検討するのは、政党間のイデオロギー距離、すなわち政党システムの分極化 (polarization) である。政党システムの分極化は、政党間の敵対関係および協力関係を示唆する指標である。

一般的に、政党システムの分極化の度合いは、政党を「左-右」軸上に位置づけてその距離を測定することによって示される。

政党を左-右軸という一次元上に位置づけることについて批判的な意見もある。たとえば、ストークス (Donald Stokes) は、社会は多くの対立次元によって特徴づけられるものであり、政党は次元毎に異なる立場に立つと指摘し (Stokes 1963)、レイプハルト (Arend Lijphart) は政党競合の争点次元として、(1)社会経済、(2)宗教、(3)文化・民族、(4)都市・農村、(5)体制支持、(6)外交、(7)脱工業的価値観という7つを挙げている (Lijphart 1984, 1999)。

このような主張があるとはいえ、多くの研究者は、政党間競合を左-右軸上で理解することの合理性を認めている。サニ (Giancomo Sani) とサルトーリによれば、先進工業社会では社会-経済的な紛争が極めて重要な対立軸となっており、政党競争もこの軸に沿って展開されているという (Sani and Sartori 1983)。あるいは、左-右次元は、政治空間内での効率的なコミュニケーションとオリエンテーションを促進する一般化された政治的手段と見なすことができるものである (Fuchs and Klingeman 1989)。

政党を左-右軸上に位置づける場合、大きく分けて3つの方法がある (Niedermayer 1996: 26-27)。

第1に、政党に関する文献や文書を分析する方法である。これは、政党綱領、政策文書、マニフェストなどで表明されている政党の主張を内容分析などにより解析するものである (Thomas 1979, Bartolini and Mair 1990)。

第2に、専門家による評定を基礎とする方法である。その評定の仕方にもいくつかパターンがあり、単純に政党を左から右へ並べさせたり (Taylor and Herman 1971)、政党ファミリーを左から右へ並べさせたりするやり方や (Sigelman and Yough 1978, Gross and Sigelman 1984, Schamir 1984)、あるいは、各党が左-右軸上で占める正確な位置を回答させるやり方がとられる (Castles and Mair 1984)。

第3に、市民の志向性に基づいて政党を位置づける方法である。これは、支持者による政党の左-右軸上の位置づけの平均値で測定されるか (Sani and Sartori 1983)、あるいは、市民による政党の左-右軸上の位置づけの平均値で測定される (Niedermayer 1990)。

いずれかの方法で政党を左-右軸上に位置づけた上で、政党システムの分極化の度合いが測定されるが、ここでも2つの方法が存在する。第1は、単純に、左-右軸上の両端に位置する政党の距離を測定し、それを分極化の大きさとする方法である。第2は、各政党を左-右軸上に位置づけた上で、それらの政党のばらつきの程度を測定する方法である。たとえば、左-右軸上の政党の位置の標準偏差をとる方法がある。これは、次のように表わすことができる。

$$POL = \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^n (LRS_i - \overline{LRS})^2}{n}}$$

$LRS_i$  = 政党  $i$  の支持者による、政党  $i$  の左-右軸上の位置づけの平均値

$\overline{LRS}$  = 全ての政党支持者による、左-右軸上における位置づけの平均値

## (6) 分節化

政党間のイデオロギー距離は、政党の連合形成の可能性にも大きな影響を及ぼす。この連合形成の可能性は、政党システムの分節化 (segmentation) という指標によっても測定される。たとえば、極度に分節化された政党システムでは、政党間に明確な仕切りが存在する。逆に、分節化していない政党システムでは、基本的には、全ての政党が連合を形成する可能性をもつ。

穏健な政党は極端な政党との協力関係を結ぶことを拒絶することが多いため、しばしば、両極の政党と他の政党との間に分節化が発生する。あるいは、社会が宗教や民族といった対立軸で分断され、政党エリートのレベルでも分断が存在するような場合には、穏健な政党同士の間でも分節化は生まれる (Sartori 1976: 邦訳 476)。

分節化は、たとえば、以下のような計算式で求めることができる。ここで、 $C_t$  は理論的に実現可能性のある連合政権の数、 $C_p$  は政治的に実現可能性のある連合政権の数を表わす。

$$S = 1 - \frac{C_p}{C_t}$$

## (7) 政権形成パターン

政党システムの特性に関して、政権形成のパターンに注目する議論もある。たとえば、メアは、政権形成をめぐる政党間競合こそが、最も重要な政党システムの特性であると主張する (Mair 1997: 199-223)。メアによれば、政権形成をめぐる政党間競合の構造は、次の3つの要素に関連づけることで理解できるという。すなわち、(1) 政権交代の有力なパターン、(2) 代替的統治の公式、そして(3) いずれの政党が統治するのかである。

政権交代のパターンには、完全な政権交代 (wholesale alternation)、部分的な政権交代 (partial alternation)、政権交代なし (nonalternation) がある。

「完全な政権交代」では、現在政権に就いているセットが、以前は野党にいたセットに完全に取って替わられる。すなわち、 $t$  回目の政権を形成する全ての政党が政権から去り、 $t+1$  回目の政権は、以前は野党であった政党あるいは政党の連合によって形成される。「部分的な政権交代」では、現在の政権の中に、その前の政権を構成していた政党のうち少なくとも1つの政党が含まれる。「政権交代なし」は、政権交代の完全な欠如により特徴づけられる。ここでは、同一の政党ないし政党連合が、長期にわたり、政権を独占的に支配し続けることになる。

代替的統治の公式 (alternative governing formulas) という要素は、政権を形成する政党ないし政党連合の顔ぶれが常に一定 (familiar) しているのか、それとも従来の組合せとは異なる新たな政党連合が形成されるなど革新的 (innovative) であるのかに関連する。

いずれの政党が統治するのかという要素は、すなわち政権へのアクセスを獲得する政党の範囲に関連するものである。ここでは、特定の政党が、政権パートナーとして許容しえない政党 (必ずしも反体制政党とは限らない) として他の諸政党から排除されているのか否かが焦点となる。

## 5 政党システム変化の測定

前節では、政党間相互作用を示す特性として7つの指標を概観した。これらの諸特性は、「政党システム変化とは何が変化することなのか」を明らかにするものである。何が変化したのかを特定できたとして、次に、「政党システム変化とはそれらがどの程度変化することなのか」が問われなければならない。

3節で述べたように、システムとは要素間の相互連関の全体から形成されるものである。それゆえ、厳密に言えば、システム変化とは、システム内部の局所的変化ではなく、システム全体としての特性が変化することと理解すべきであろう。

システムの個別要素の変化やある特定の要素間関係の変化は、その

変化の程度にかかわらず、システム変化につながる可能性とつながらない可能性の両方をもつ。個別的な要素変化や要素間関係の変化が極めて顕著でありながらも、システム全体がほとんど影響を受けない場合がある。政党システム変化を強調する議論では看過されがちであるが、システムは、システム変化をもたらさうような攪乱要因に取り囲まれつつ、あるいは内部に潜在的攪乱要因を抱えつつ、全体としては適応的自己安定化を実現している。他方では、個別的な要素変化や要素間関係の変化がわずかであったとしても、システム全体が本質的に変わるような場合もある（適応的自己組織化）。

政党システム研究においては、システム全体の特性に言及するものとして、政党システムの類型 (typology) の議論がある。政党システムの類型論では、取り上げるべきいくつかの変数を設定・考察した上で、それらの諸変数の組合せから導かれるシステムのタイプが区別される。換言すれば、システム全体の特性に見られる相違に基づいて、システムが複数のタイプに分けられているのである。それゆえ、政党システムがあるタイプから他のタイプへと変化したとき、それを政党システム変化と理解することができるであろう (Mair 1990: 16-17, 1997: 51-54)。政党システム変化を理解する上で有用な類型論として、サルトーリとメアの類型論を取り上げよう。

サルトーリは、競合的な政党システムを、有意政党の数とイデオロギー距離によって類型化した (Sartori 1976)。彼にとって、有意政党の数というのは、あくまでも政党間関係に影響を与えるという意味で重要な変数となる。すなわち「政党数が私たちの興味をひきつけるのはそれが政党制のメカニクスに影響を与える時だけである。換言すればフォーマットはメカニカルな先有傾向を含んでいる時に限って、興味深い変数になる」という (Sartori 1976: 邦訳 223)。

有意政党の数とイデオロギー距離を組み合わせた上で、サルトーリは、競合的な政党システムを、1党優位政党システム、2党システム、穏健な多党システム、分極的多党システム、原子化政党システムとい

う5つのタイプに識別した。原子化政党システムというのは、残余カテゴリーに属するものであり現実にほとんど存在することがないので、ここでは除外し、1党優位政党システム、2党システム、穏健な多党システム、分極的多党システムの全体的特性を確認しておこう（Sartori 1976: 邦訳 227-358）。

まず、2党システムの全体的特性としては、(1)2つの政党が絶対多数議席の獲得を目指して競合している、(2)2つの政党のうちどちらか一方が実際に議会内過半数勢力を確保するのに成功している、(3)過半数を得た政党は進んで単独政権を形成しようとする、(4)政権交代が行われる確かな可能性があるという点が指摘される。

穏健な多党システムの場合には、(1)有意政党間のイデオロギー距離が比較的小さい、(2)二極化した連合政権指向型の政党配置、(3)求心的競合という特徴が見られる。

分極的多党システムについては、次のような全体的特性を列挙している。すなわち、(1)有意な反体制政党が存在する、(2)相互に排他的な二つの野党勢力（双系野党）が存在する、(3)中間位置を占める政党の存在によって求心的競合が阻害されている、(4)反体制政党、双系野党、そして中間位置を占める政党の存在によって、システムが分極化している、(5)遠心的な競合の力学が強く見られる、(6)イデオロギー・パターンが根源的で、政党の包括化戦略が制限される、(7)政権担当の機会が特定の政党に限られ、政権形成の機会から排除された政党は無責任野党となる、(8)無責任野党の存在によって、せり上げの政治と過剰公約の政治がもたらされる。

1党優位政党システムは、特殊なケースである。このシステムの作動にとっては、優位政党の数やイデオロギー距離というのはあまり大きな影響がない。極端な言い方をすれば、政党の数がいくつであっても、分極化の程度がどれほどあっても構わない。むしろ、このシステムの本質的特徴は権力の特殊な配分パターンにある。すなわち、2つ以上の政党を含み自由で公正な競争が行われているなかで、特定の政党が一

貫して政権を握り、政権交代が事実上発生しないようなシステムである。政権交代が起こるとき、つまり一貫して政権を握っている政党が何らかの理由で政権の座から滑り落ちるとき、それは一党優位政党システムから他の多党システムへの変化であると見なすことができる。

さて、現実的な観点から言えば、先進諸国の政党システムは、そのほとんどが穏健な多党システムか分極的多党システムに含まれているので、この2タイプの間での移行が焦点となるだろう。

サルトーリは、有意政党の数について、穏健な多党システムは3～5党、分極的多党システムは6～8党という一応の基準を提出しているが、すでに見たように、政党数それだけに注目しても意味はない。たとえば、政党数の変動にともなって、イデオロギー的分極化の幅が拡張ないし縮小した場合には、タイプの変化に言及することも可能になるだろう。

サルトーリ自身が述べているように、両タイプの大きな相違点は、反体制野党が存在しているか否か、そして野党が2つの勢力に分裂しているか否かにある (Sartori 1976: 邦訳 299)。たとえば、分極的多党システムから有意な反体制政党の1つが消滅した場合、それは双系野党の存立基盤を掘り崩し、分極化の度合いを低下させ、求心的な競合の力学をもたらし、かくしてそのシステムは穏健な多党システムへと移行することになるかもしれない。

次にメアの類型論を見てみよう (Mair 1997: 199-223)。メアは、政権形成をめぐる政党間競合を重視し、そこに見られる3つの要素——政権交代の有力なパターン、代替的統治の公式、いずれの政党が統治するのか——を組み合わせて、閉鎖的な (closed) 競合の構造と、開放的な (open) 競合の構造とに区別した。両タイプの特徴は表1のようになる。

閉鎖的な競合構造の特徴は、政権交代が起きないか、あるいは起きたとしても特定の政権交代パターンであり、政権を形成する顔ぶれも一定であり、政権に参加する機会をもつ政党が少数に限定されていて、

表1 閉鎖的・開放的な競合の構造

閉鎖的な競合構造	開放的な競合構造
完全な政権交代 または政権交代なし	部分的な政権交代 または部分的な政権交代と完全な政権交代の混合
一定的な統治公式	革新的な統治公式
政権へのアクセスは少数の政党に限定されている	政権へのアクセスは多くの政党に開放されている
〔事例〕 イギリス ニュージーランド (1990年代中期まで) 日本 (1955-1993) スイス アイルランド (1948-1989)	〔事例〕 デンマーク オランダ 新たに発生しつつある政党システム

出所 Mair (1997: 212)

新政党や「アウトサイダー」と見なされている政党が政権参加の敷居を超えることは事実上不可能だという点にある。このような閉鎖的な競合構造は、明らかに、予測可能性が高いものである。

それに対して、開放的な競合構造の特徴は、さまざまな政権交代のパターンが見られ、政権を形成する顔ぶれも頻繁に変わり、新政党が比較的容易に政権参加の機会をもつ点にある。このような開放的な競合構造は、明らかに、予測不可能性が高いものである。

閉鎖的な競合構造が形成・維持されるか否かは、既存政党の戦略次第である。既存政党が革新的な統治公式の実験に反対し、政権に新しい政党が加わることを阻止する戦略を採るときに、閉鎖的な構造が発展する。さらに、閉鎖的な競合構造の発展には、競合のパターンや政権形成過程における安定的な規範や協定が必要不可欠である。つまり、競合の構造の閉鎖性は時間の関数であり、新たに発生しつつある政党システムを特徴づけるものではない。

メアは、政党の競合構造の変化（すなわち政党システム変化）について、いくつかの事例に言及しつつ、有権者変化との関連性を論じている。ここでは、デンマーク、カナダ、アイルランドの事例について概観し

よう (Mair 1997: 214-223)。

1973年のデンマーク議会選挙は、実質的な有権者変化を示した。議席を獲得した政党は倍増し、共産党や新しく結成された右派政党が参入したため、政党システムの分極化は大きくなった。しかしながら、このような大規模な有権者変化にもかかわらず、デンマークにおける政党の競合構造は変化していない。確かに、戦後初めてリベラル政党が単独で少数政権を形成した。しかし、その後が続いて形成された社会民主党による少数政権や、中道右派政権は、1973年以前に経験されたことのある政権形態である。

かくして、(1)統治公式は過去も現在も「革新的」であり、(2)政権へのアクセスは過去も現在も新政党に開かれており、(3)政権交代のパターンは過去も現在も「完全な政権交代」と「部分的政権交代」とを規則的に経験していることから、デンマークは現在でも相対的に開放的な構造を維持していることになる。

カナダでは、1993年総選挙でヴォラティリィが42%に上昇した。保守党の得票率は16%にまで減少し、議席数はわずか2議席となった。改革党とブロック・ケベコワという新しい2政党が議席獲得に成功した。この2政党は明確な地域特性をもっており、有権者編成の永続的変動の兆候なのかもしれない。しかし、それと同時に、明確な継続性も存在する。すなわち、保守党に対する伝統的な対抗勢力である自由党が、強力な多数派をもって政権に復帰したことである。少なくともこれまでのところ、政権交代のパターン、革新性の程度、新政党の政権へのアクセスの程度を見る限り、カナダの政党システムは従来の政党システムを維持していると言える。

ただし、カナダの政党システムは、ある次元では明らかに変化した。自由党に対抗する野党が現在では2政党になり、さらに地域的な分断が連邦レベルで発生して「完全な政権交代」の維持可能性が低減しつつある。この変化の可能性が存在するがゆえに、カナダの政党システムが不変であると断言することはできない。

アイルランドの政党システムは、強固な亀裂構造の欠如と制度の継続性によって非常に安定的であった。政権はアイルランド共和党が形成するか、あるいはそれ以外の政党（主にアイルランド統一党と労働党）の連合が形成するかのいずれかであった。しかし、1989年にアイルランド共和党は、これまでの戦略を180度転換して、新しく結成された右派リベラル政党との連合を決断した。その四年後には、アイルランド共和党は労働党との新連合を形成した。

この2つの決断の結果、アイルランドの政党システムは変化した。戦後のアイルランド政党システムが築き上げてきたものは、アイルランド共和党と右派政党との連合によりその根底が崩され、さらにアイルランド共和党と労働党との連合によって、完全に破壊された。1989年までに、アイルランドの政党システムは、2極化された競合のパターンを中心として構築されてきた。アイルランド共和党対それ以外の政党という競合パターンである。しかし、表面上は非同盟的であった新政党と連合を形成したことで、アイルランド共和党は2極のうちの前者の極に傷をつけた。さらに、伝統的な反対勢力、つまり「それ以外」の政党の1つであった労働党との連合形成によって、後者の極も破壊したのである。

アイルランドにおける政党システムの変化は、少なくとも初めのうちは、有権者変化がほとんど見られない状況で起こった。1989年選挙におけるヴォラティリティはわずか7.8%であり、この値は戦後のアイルランドにおける平均よりも低いものであった。既存政党の支持率を見てみると、アイルランド共和党に対する支持は44.1%から44.2%に、アイルランド統一党への支持は27.1%から29.3%に、労働党に対する支持は6.4%から9.5%にそれぞれ上昇している。有権者の安定性と政党システムの根本的な変動が同時に起きていたのである。

要するに、(1)デンマークでは、実質的な有権者変化が重大な政党システム変化を導かなかった、(2)アイルランドでは、選挙における安定性にもかかわらず重大な政党システムの変化が起こった、(3)カナダで

は、並外れた有権者の流動化にもかかわらず新しいタイプの政党システムが発展しているか否かは依然として疑問符がつくのである。ここから導かれるのは、政党システムの持続性ないし変化と、有権者の安定性ないし変化とは区別しなければならないということである。

政党システム変化をタイプの変化に関連づけて理解する方法は、厳密な定義という利点を享受でき、明確な結論を引き出すことができる。それゆえ、政党システムの安定と変化をめぐる知的泥沼を回避する有効な方法の1つである。

しかし、一方では、すでに議論したように、適用する政党システムの類型そのものが完全な合意を得ることは困難であり、他方では、この方法で測定した場合には、政党システム変化があまりにも稀な現象になってしまう。さらに、このようなオール・オア・ナッシングの測定方法では、タイプ変化にまでは至っていない重要な諸特性の変化を看過する危険性も否定できない。

そこでスミスは、政党システム変化のレベルを4つに区分けして測定することを提案する。すなわち、(1)一時的な揺らぎ (temporary fluctuations)、(2)限定的な変化 (restricted change)、(3)全般的な変化 (general change)、(4)転換 (transformation) という4つのレベルである (Smith 1989, 1990)。

「一時的な揺らぎ」とは、長期的な傾向をもたない短期的な特性変化を意味する。何が「一時的」であるのかを決めることは難しいこともあるが、実際的には、政党の盛衰は容易に認識できるであろう。ある政党は、システムを実質的に変えることなく、登場し退場して行く。特定の争点をめぐる論争が激化して、分極化の程度が一時的に高くなるとしても、その論争はすぐに何の傷跡も残すことなく解決するかもしれない。スミスによれば、一時的か否かを見極めるには3回程度の選挙が必要であるという。このくらいの期間があれば、新規参入した政党が確固としてものとなるのか、そしてシステムのバランスや他の政党の立場に影響を与えるのかを判断できるであろう。いずれにして

も、このような揺らぎは、システムにおける変化とは見なされない。

「限定的な変化」とは、システム内で恒常的に発生する変化であるが、システムの他のほとんどの特性がそのままであるという点で限定的なものとされる。新政党が設立され古い政党が衰退したり、システムがより分極化したりするかもしれない。あるいは、選挙ヴォラティリティが上昇するかもしれない。しかしながら、それぞれの変化は自己完結的なものであり、他の特性とは独立している。

「全般的変化」とは、いくつかの特性の変化が同時あるいは連続的に起こることを意味する。全般的変化が起きている政党システムは、一時的には不安定な状況である。なぜなら、新たな均衡が確立されるまで、さらなる反応が起こりうるからである。全般的変化とは、たとえば、先に述べた有意政党の変化とそれにともなう他の特性の変化である。すなわち、穏健な多党システムにおいて有意政党が増加したとき、それにともない双系野党が現出し、政党競合の本質部分が変化することになり、最終的には分極的多党システムへと移行する。従って、他の特性の変化を誘発するような特性変化が発生しているか否かがポイントとなる。

「転換」とは、システムの全ての特性が変化し、全く別の政党システムが形成されることを意味する。このような転換は、たとえば、体制崩壊による連続性の破綻のような極端な状況下でしか起きることはない。しかしながら、全く別の政党システムの形成をともなわない転換の可能性もある。可能性として考えられるのは、1つの中心的な特性 (one central feature) が根本的に変化して、あらゆる連続性が押し流されてしまうような場合である。

## 6 政党システムに影響を及ぼす要因

政党システム変化の分析枠組みで最後に検討しなければならないのは、「政党システム変化がなぜ起きたのか」という問題である。換言すれば、政党システムに影響を及ぼした要因は何かということである。

表2 政党システムの発展に影響を及ぼす要因

構造的次元	行為者次元
制度的枠組み 社会構造	政党 市民

出所 Niedermayer (1996: 32)

ニーダーマイヤー (Oskar Niedermayer) は、政党システムに影響を及ぼす要因を構造的次元と行為者次元とに分けて整理している (Niedermayer 1996: 32-40)。構造的次元には制度的枠組みと社会構造が含まれ、行為者次元には政党の行動と市民の行動が含まれる。

政党システムに影響を及ぼす制度的枠組みとしては、選挙制度、政党資金に関する制度、違憲政党に関する制度などがある。とくに選挙制度が政党システムに及ぼす影響については、これまでに多くの研究の蓄積が見られる。

ヘルメンス (Ferdinand Hermens) は、比例代表制は必然的に政党システムの破片化を生み、多数代表制は2党システムを生むとした (Hermens 1941)。デュヴェルジェ (Maurice Duverger) によれば、(1)比例代表制は、多党制的で、強固で、自立的かつ安定した政党制を促進する、(2)2回投票による多数決制は、多党制的で、柔軟性があり、非自立的かつ比較的安定した政党制を促進する、(3)単純多数1回投票制は、主要な独立した政党間の権力の交替をもった2党制を助長することになる (Duverger 1959: 邦訳 227-228)。両者はともに、比例代表制は多党システムをもたらし、多数代表制は2党システムをもたらすと考えたのであるが、このような主張は理論的にも経験的にも反論されている。いずれにしても、選挙制度と政党システムとの間に単純な1対1の関係は成立しないのである。

レイは、選挙制度が政党システムに及ぼす影響の程度はさまざまであるが、その影響の方向は同じであると主張した。すなわち、単純多数代表制や絶対多数代表制だけでなく全ての選挙制度は、大規模政党を過大代表し、小規模政党を過小代表する傾向があるという (Rae 1967:

67-129)。

デュヴェルジェは、選挙制度の心理的効果についても言及している。「単純多数1回投票制度の下で活動する3つの政党があるところでは、有権者が継続して第3党に投票するとすれば、自分たちの票はむだになったということにただちに悟る。つまり、それゆえに、より大きな悪を防ぐために2つの対抗者のうちのより小さな悪に、自分たちの投票を委譲する自然の傾向がでてくる」という (Duverger 1959: 邦訳248)。

政党への公的助成制度もまた、政党システムに大きな影響を及ぼす。政党への公的助成は、一般的には、選挙で一定の得票以上を獲得した政党に対して、得票率や議席率に応じて支出されるものであり、明らかに既存の政党が有利な立場にある。たとえば、新たに設立された政党は、最初の選挙に臨むにあたっては、公的助成を受けられる立場にない。公的助成で十分な資金を獲得できるのであれば、政党は、不安定な選挙民との関係性をあえて強化する必要性を感じなくなるかもしれない。また、既存政党の間に公的助成に関する共通のインセンティブが働くことになり、既成政党間にカルテルが結ばれるかもしれない (Katz and Mair 1995)。

構造次元に含まれるもう1つの要因は社会構造である。政党システムに影響を及ぼす社会構造的変化にはさまざまなものがある。しばしば指摘されているのは、脱工業社会への移行とそれにともなう産業構造の変化、教育機会の拡大、福祉国家の変容、マスメディアの発達などである。これらの変化は、それ自体が政党システムに影響を及ぼすと同時に、市民の行動にも大きな影響を及ぼす。たとえば、脱工業社会への移行、産業構造の変化、そして教育機会の拡大は、脱物質主義的価値観をもたらし、ニュー・ポリティクスと呼ばれる新たな対立軸をもたらした。

ここで、キツェルト (Herbert Kitschelt) の整理を参考にしておこう (Kitschelt 1997)。キツェルトによれば、1970年代以降に西欧政党システムに直接的・間接的に影響を及ぼしている社会的変化として、(1)

技術の領域におけるエレクトロニクス革命、(2)新興工業国の台頭による国際競争の激化、(3)福祉国家の変容を挙げることができるという。

エレクトロニクス革命によって、生産労働者のサービス労働者に対する割合は継続的に減少した。高い技術をもつ労働者への需要が高まる一方で、技術をもたないか低い技術しかもたない労働者への需要は低下した。さらに、運輸や通信のコスト低下にともない、経済部門の国際競争が拡大した。

手工業市場における新興工業国の台頭にともない、欧州諸国の手工業部門の給与レベルが低下した。企業は価格競争を回避するために洗練された製品の製造へと向かったため、高度な技術をもつ技術者の需要が一層高まった。

資本市場の国際化（開放化）により、労使協定が結ばれ収益率があまり高くないような国家からの資本の撤退が起きた。それにより、労使間交渉の主導権は資本家にシフトすることになり、賃金の抑制や社会保障費用の圧縮への圧力が高まった。

人口の高齢化、高い水位にある失業率、女性の労働市場進出などによって、公共サービス部門は肥大化した。ところが、経済成長の鈍化、国家予算の逼迫化、国際競争（とりわけ国際資本の国際競争）の激化にともない、肥大化した公共サービス部門の維持は困難になりつつある。今日では、市民の公共サービス依存をめぐって、経済的論争だけでなく政治的・道徳的論争も起きている。

これらの社会構造変化が政党システムにもたらした1つの影響として、左-右対立軸の再活性化を指摘できる。ここでの紛争は、階級間対立というよりも部門間対立である。国際競争にさらされている民間企業の管理職や雇用者は、保護産業や公的部門で働く人々よりも、再配分手段の抑制への期待が強い。

社会構造の政党システムへの影響を考える場合、当然ながら、亀裂構造の変化も重要な焦点になる。ダルトンらが主張するように、伝統的な亀裂構造が弱体化し、同時に脱工業革命が新たな社会的・政治的

亀裂構造（ニュー・ポリティクスをめぐる亀裂構造）をもたらすとすれば、それは政党システムにも大きな影響を及ぼす可能性が高い。そこで重要になるのは、亀裂構造に対する政党および市民の対応である。たとえば、新しい亀裂構造の顕在化に政党が首尾良く対応できなかった場合には、新しい亀裂構造を代表する政党の参入、政党数の増加、有権者変化の増大、これらの変化にともなう他の特性の変化といった影響が政党システムに及ぶ可能性がある。

最後に、政党の行動の変化が政党システムに及ぼす影響について検討しよう。キルヒハイマー（Otto Kirchheimer）によれば、戦前の西欧の政党システムは「個人代表の政党」と「大衆統合政党」によってかたちづけられていたが、戦後には「個人代表の政党」は例外的な存在となり、「大衆統合政党」も「包括政党」へと変化しているという。包括政党の特徴は、(1)政党のもつイデオロギー装置の縮小、(2)党組織における幹部グループの強力化、(3)党員の役割の減少、(4)特定の社会階級や特定宗派の信徒の比重低下、(5)さまざまな利益団体へのアプローチである（Kirchheimer 1965）。

このような包括政党が政党システムに及ぼす影響であるが、いずれの側面を注目するかによって、焦点となる政党システムの特性も異なってくる。包括政党の政党競合への影響に注目する場合には、包括政党化に成功した政党のみが生き残ることができ、他の政党を凌駕してしまうため、政党システムの破片化が低下するとされる（Wolinetz 1979）。スミスはさらに極端に、「究極的には、包括化の政治は2つの重要な政党の残存のみを要求する」と表現している（Smith 1982: 64）。2大政党が包括政党化するとすれば、既存の機会構造が変化するかもしれない、それゆえ非対称性も変化するかもしれない。

包括政党による政党－有権者関係への影響に注目して、メアは次のように述べている。この言明から示唆されるのは、政党－有権者関係の脆弱化によるヴォラティリティの増大である。

包括政党は、自身が属する社会との特定の組織的結び付きを絶ち、選挙民からも離れて活動し始める。そして「ボトムアップ」の政党から「トップダウン」の政党に変化し、選挙市場を狭隘化するのではなく、むしろ選挙市場での競争を選択する。さらにアイデンティフィケーションの上に立つのではなく、条件付きの支持の上に立つ。支持者の囲い込みではなく、支持者からの承認を要求する。これらの結果、偶発性の可能性が高まり、ランダム投票に至るかもしれない (Mair 1989: 182)。

包括政党論における「イデオロギー装置の縮小」という点に注目すると、脱イデオロギー化と求心化の力学が強まることによって、分極化の低下が起き、さらには分割化も変化するかもしれない。

もちろん、キルヒハイマーの包括政党論以降にも重要な政党組織論が展開されている。たとえば、パネビアンコ (Angelo Panebianco) の選挙—プロフェッショナル政党の議論や、カツツ (Richard Katz) とメアによるカルテル政党論なども、政党システムに大きな影響を及ぼすであろう (Panebianco 1988, Katz and Mair 1995)。要するに、ここで重要なことは、政党がどのような組織モデルを採用し、どのような戦略をとるかということが、政党システムにとって大きな影響をもつということである。

## 7 おわりに

本稿では、政党システムの何が、どのように／どの程度、そしてなぜ変化したのか (あるいは変化しなかったのか) を総体的に提示しうる体系的な分析枠組みの素描を試みてきた。3節で指摘したように、政党システムがシステム概念を基礎にしているのであれば、唯一絶対の分析枠組みを構築することは極めて困難であろう。しかしながら、そのことは、政党システム変化をどのように分析しても良いという意味では

ない。重要なことは、政党システム変化が何を意味し、どのように測定され、そして何によってもたらされたのかを明確に意識しながら、分析を進めることである。そのような分析が蓄積されることによって、政党システム変化の研究は、より建設的な意味で、豊饒なものとなっていくであろう。

#### 参考文献

- Ascher, William and Tarrow, Sidney (1975) 'The Stability of Communist Electorates: Evidence from a Longitudinal Analysis of French and Italian Aggregate Data,' *American Journal of Political Science*, 19: 475-494.
- Bartolini, Stefano and Mair, Peter (1990) *Identity, Competition, and Electoral Availability: The Stabilisation of European Electorates 1885-1985*, Cambridge University Press.
- von Bertalanffy, Ludwig, (1968) *General System Theory: Foundations, Development, Applications*, George Braziller. (長野敬・太田邦昌訳 (1973) 『一般システム理論』みすず書房)
- Blondel, Jean (1968) 'Party Systems and Patterns of Government in Western Democracies,' *Canadian Journal of Political Science*, 1(2): 180-203.
- Borre, Ole (1980) 'Electoral Instability in Four Nordic Countries,' *Comparative Political Studies*, 13(2): 141-171.
- Castles, Francis and Mair, Peter (1984) 'Left-Right Political Scales: Some "Expert" Judgments,' *European Journal Political Research*, 12(1): 73-88.
- Dahl, Robert (1966) 'Pattern of Opposition' in Robert Dahl (ed.), *Political Oppositions in Western Europe*, Yale University Press.
- Dalton, Russell (1996) 'Political Cleavages, Issues, and Electoral Change,' in Lawrence LeDuc, Richard Niemi, and Pippa Norris (eds.), *Comparing Democracies: Elections and Voting in Global Perspective*, Sage: 319-342.
- Dalton, Russell, Beck, Paul Allen, and Flanagan, Scott (1984) 'Electoral Change in Advanced Industrial Democracies,' in Russell Dalton, Scott Flanagan, and Paul Allen Beck (eds.), *Electoral Change in Advanced Industrial Democracies: Realignment or Dealignment?* Princeton University Press: 3-22.
- Dalton, Russell, Flanagan, Scott, and Beck, Paul Allen (1984) 'Political Forces and Partisan Change,' in Russell Dalton, Scott Flanagan, and

- Paul Allen Beck (eds.), *Electoral Change in Advanced Industrial Democracies: Realignment or Dealignment?* Princeton University Press: 451-476.
- Dodd, Lawrence (1976) *Coalitions in Parliamentary Government*, Princeton University Press. (岡沢憲英訳 (1977) 『連合政権考証：政党政治の数量分析』政治広報センター)
- Drummond, Andrew (2006) 'The Impact of Party Affect on Voter Sincerity in Open and Closed Electoral Systems,' Center for the Study of Democracy, Paper 06-09.  
(<http://repositories.cdlib.org/csd/06-09/>)
- Drummond, Andrew (2002) 'Electoral Volatility and Party Decline in Western Democracies: 1970-1995,' Center for the Study of Democracy, Paper 02-02.  
(<http://repositories.cdlib.org/csd/02-02/>)
- Dunleavy, Patrick and Boucek, Françoise (2003) 'Constructing the Number of Parties,' *Party Politics*, 9(3): 291-315.
- Duverger, Maurice (1954) *Les Partis Politiques*, Librairie Armond Colin. (岡野加穂留訳 (1970) 『政党社会学』潮出版)
- Ersson, Svante and Lane, Jan-Erik (1998) 'Electoral Instability and Party System Change in Western Europe,' in Paul Pennings and Jan-Erik Lane (eds.), *Comparing Party System Change*, Routledge: 23-39.
- Evans, Jocelyn (2002) 'In Defence of Sartori: Party System Change, Voter Preference Distributions and Other Competitive Incentives,' *Party Politics*, 8(2): 155-174.
- Flanagan, Scott (1971) 'The Japanese Party System in Transition,' *Comparative Politics*, 3(2): 231-234.
- Fuchs, Dieter and Klingeman, Hnas-Dietrich (1989) 'The Left-Right Schema,' in Kent Jennings, Jan van Deth, and Samuel Barnes (et al.), *Continuities in Political Action: A Longitudinal Study of Political Orientations in Three Western Democracies*, Walter de Gruyter: 203-234.
- Gross, Donald and Sigelman, Lee (1984) 'Comparing Party Systems: A Multi-dimensional Approach,' *Comparative Politics*, 16(4): 463-479.
- Hall, A.D., and Fagen, R.E. (1956) 'Definition of System,' *General Systems*, 1: 18-28.
- Hawks, A.G. (1969) 'An Approach to the Analysis of Electoral Swing,' *Journal of the Royal Statistical Society*, 132(1): 68-69.
- Hermens, Ferdinand (1941) *Democracy or Anarchy?: A Study of Proportional Representation*, University of Notre Dame Press.

- Katz, Richard and Mair, Peter (1995) 'Changing Models of Party Organization and Party Democracy: The Emergence of the Cartel Party,' *Party Politics*, 1(1): 5-28.
- Kirchheimer, Otto (1965) 'Der Wandel des westeuropäischen Parteiensystems,' *Politische Vierteljahresschrift*, 6: 20-41.
- Kitschelt, Herbert (1997) 'European Party Systems: Continuity and Change,' in Martin Rhodes, Paul Heywood, and Vincent Wright (eds.), *Developments in West European Politics*, Macmillan: 131-150.
- Laakso, Markku and Taagepera, Rein (1979) "Effective" Number of Parties: A Measure with Application to West Europe,' *Comparative Political Studies*, 12(1): 3-27.
- Lane, Jan-Erik and Ersson, Svante (1994) *Politics and Society in Western Europe, 3rd Edition*, Sage.
- Lijphart, Arend (1999) *Patterns of Democracy: Government Forms and Performance in Thirty-Six Countries*, Yale University Press. (粕谷祐子訳 (2005) 『民主主義対民主主義：多数決型とコンセンサス型の36ヶ国比較研究』勁草書房)
- Lijphart, Arend (1984) *Democracies: Patterns of Majoritarian and Consensus Government in Twenty-One Countries*, Yale University Press.
- Lipset, Seymour, and Rokkan, Stein (1967) 'Cleavage Structures, Party Systems and Voter Alignments: An Introduction,' in Seymour Lipset and Stein Rokkan (eds.), *Party Systems and Voter Alignments: Cross-National Perspectives*, Free Press: 1-64.
- Mair, Peter (2001) 'The Freezing Hypothesis: An Evaluation,' in Lauri Karvonen and Stein Kuhnle (eds.), *Party Systems and Voter Alignments Revised*, Routledge: 27-44.
- Mair, Peter (1997) *Party System Change: Approaches and Interpretations*, Oxford University Press.
- Mair, Peter (1990) 'Introduction,' in Peter Mair (ed.), *The West European Party System*, Oxford University Press: 1-22.
- Mair, Peter (1989) 'Continuity, Change and the Vulnerability of Party,' in Peter Mair and Gordon Smith (eds.), *Understanding Party System Change in Western Europe*, Frank Cass: 169-187.
- Mair, Peter (1983) 'Adaptation and Control: Towards an Understanding of Party and Party System Change,' in Hans Daalder and Peter Mair (eds.), *Western European Party Systems: Continuity and Change*, Sage: 405-429.
- Mayer, Lawrence (1972) 'An Analysis of Measures of Crosscutting and

- Fragmentation,' *Comparative Politics*, 4(4): 405-415.
- Mayer, Lawrence (1980) 'A Note on the Aggregation of Party Systems,' in Peter Merkl (ed.), *Western European Party Systems: Trends and Prospects*, Free Press: 515-520.
- Milder, N. David (1974) 'Definitions and Measures of the Degree of Macro-Level Party Competition in Multiparty Systems,' *Comparative Political Studies*, 6(4): 431-456.
- Miller, William (1972) 'Measures of Electoral Change Using Aggregate Data,' *Journal of the Royal Statistical Society*, 135(1): 122-142.
- Molinar, Juan (1991) 'Counting the Number of Parties: An Alternative Index,' *American Political Science Review*, 85(4): 1383-1389.
- Niedermayer, Oskar (1998) 'German Unification and Party System Change,' in Paul Pennings and Jan-Erik Lane (eds.), *Comparing Party System Change*, Routledge: 137-150.
- Niedermayer, Oskar (1996) 'Zur Systematischen Analyse der Entwicklung von Parteiensystemen,' in Oscar W. Gabriel und Jrgen W. Falter (Hrsg.), *Wahlen und Politische Einstellungen in Westlichen Demokraten*, Peter Lang: 19-49.
- Niedermayer, Oskar (1990) 'Sozialstruktur, Politische Orientierungen und die Unterstützung extrem rechter Parteien in Westeuropa,' *Zeitschrift für Parlamentsfragen*, 21(4): 564-582.
- Panbianco, Angelo (1988) *Political Parties: Organizations and Power*, Cambridge University Press. (村上信一郎訳 (2005) 『政党：組織と権力』 ミネルヴァ書房)
- Pennings, Paul and Lane, Jan-Erik (1998) 'Introduction,' in Paul Pennings and Jan-Erik Lane (eds.), *Comparing Party System Change*, Routledge: 1-19.
- Pedersen, Mogens (1979) 'The Dynamics of European Party Systems: Changing Patterns of Electoral Volatility,' *European Journal of Political Research*, 7(1): 1-26.
- Pedersen, Mogens (1983) 'Changing Patterns of Electoral Volatility in European Party Systems; 1948-1977: Exploration in Explanation,' in Hans Daalder and Peter Mair (eds.), *Western European Party Systems: Continuity and Change*, Sage: 29-66.
- Przeworski, Adam (1975) 'Institutionalization of Voting Patterns, or is Mobilization a Source of Decay?' *American Political Science Review*, 69(1): 49-67.
- Rae, Douglas (1967) *The Political Consequences of Electoral Laws*, Yale University Press.

- Rae, Douglas (1968) 'A Note on the Fractionalization of some European Party Systems' *Comparative Political Studies*, 1 (3): 413-418.
- Rokkan, Stein (1968) 'The Structuring of Mass Politics in the Smaller European Democracies: A Developmental Typology,' *Comparative Studies in Society and History*, 10 (2): 173-210.
- Rose, Richard and Urwin, Dereck (1970) 'Persistence and Change in Western Party Systems since 1945,' *Political Studies*, 18 (3): 287-319.
- Sani, Giacomo, and Sartori, Giovanni (1983) 'Polarization, Fragmentation and Competition in Western Democracies,' in Hans Daalder and Peter Mair (eds.), *Western European Party Systems: Continuity and Change*, Sage: 307-340.
- Sartori, Giovanni (1976) *Parties and Party Systems: A Framework for Analysis*, Cambridge University Press. (岡沢憲英・川野秀之訳 (1992) 『現代政党学：政党システム論の分析枠組み〔新装版〕』早稲田大学出版部)
- Scarrow, Susan (2006) 'Party Subsidies and the Freezing Party Competition: Do Cartel Mechanisms Work?' *West European Politics*, 29 (4): 619-639.
- Schamir, Michael (1984) 'Are Western Party Systems "Frozen"? A Comparative Dynamic Analysis,' *Comparative Political Studies*, 17 (1): 35-79.
- Siaroff, Alan (2006) 'A Typology of Contemporary Party Systems' paper presented at the 20th World Congress of the International Political Science Association, Fukuoka, Japan.
- Smith, Gordon (1989) 'A System Perspective on Party System Change,' *Journal of Theoretical Politics*, 1 (3): 349-363.
- Smith, Gordon (1990) 'Core Persistence: System Change and the "People's Party",' in Peter Mair and Gordon Smith (eds.), *Understanding Party System Change in Western Europe*, Frank Cass: 157-168.
- Smith, Gordon (1982) 'The German Volkspartei and the Career of the Catch-All Concept,' in Herbert Döring and Gordon Smith (eds.), *Party Government and Political Culture in West Germany*, St. Martin's Press: 59-76.
- Stokes, Donald (1963) 'Spatial Models of Party Competition,' *American Political Science Review*, 57 (2): 368-377.
- Thomas, John (1979) 'The Changing Nature of Partisan Divisions in the West: Trends in Domestic Policy Orientations in Ten Party Systems,' *European Journal of Political Research*, 7 (4): 397-413
- Ware, Alan (1996) *Political Parties and Party Systems*, Oxford University

Press.

Webb, Paul (2002) 'Party Systems, Electoral Cleavages and Government Stability,' in Paul Heywood, Erik Jones, and Martin Rhodes (eds.), *Developments in West European Politics 2*, Palgrave: 115-134.

Wildgen, John (1971) 'The Measurement of Hyperfractionalization,' *Comparative Political Studies*, 4(2): 233-243.

Wolinetz, Steven (2004) 'Classifying Party Systems: Where Have All the Typologies gone?' paper prepared for the Annual Meeting of the Canadian Political Science Association, Winnipeg, Manitoba.

Wolinetz, Steven (1979) 'The Transformation of Western European Party Systems Revisited,' *West European Politics*, 2(1): 4-28.

伊藤重行 (1987) 『システム ポリティクス』 勁草書房。

岩崎正洋 (1999) 『政党システムの理論』 東海大学出版会。

氏家伸一 (1986) 「包括政党」 西川知一編 『比較政治の分析枠組』 ミネルヴァ書房：173-196。

江上能義 (1985) 「政治体系の理論的展開」 福岡政行・江上能義・大谷博愛・谷藤悦史・新川達郎・青木泰子 『政治の体系・文化・社会化』 芦書房：45-81。

岡沢憲芙 (1993) 「G・サルトーリ：比較政治学の完成」 白鳥令編 『現代政治学の理論【上】〔新装版〕』：217-252。

小野耕二 (2000) 『転換期の政治変容』 日本評論社。

河田潤一 (1986) 「社会的クリーヴィッジと政党システムの変化」 西川知一編 『比較政治の分析枠組』 ミネルヴァ書房：89-148。

川人貞史・吉野孝・平野浩・加藤淳子 (2001) 『現代の政党と選挙』 有斐閣。

北原貞輔 (1986) 『システム科学入門』 有斐閣。

小平修 (1991) 『政党制の比較政治学』 ミネルヴァ書房。

小林道憲 (2007) 『複雑系の哲学：21世紀の科学への哲学入門』 麗澤大学出版会。

篠原一 (1982) 「政党システムとサルトーリ」 『ポスト産業社会の政治』 東京大学出版会：170-192。

谷藤悦史 (1985) 「政治体系理論の形成と変容」 福岡政行・江上能義・大谷博愛・谷藤悦史・新川達郎・青木泰子 『政治の体系・文化・社会化』 芦書房：15-44。

眞柄秀子・井戸正伸 (2004) 『比較政治学 (改訂版)』 放送大学教育振興会。

的場敏博 (2003) 『現代政党システムの変容：90年代における危機の深化』 有斐閣。

山川雄巳 (1968) 『政治体系理論』 有斐閣。

〔付記〕本稿は、2007年度日本政治学会研究会報告ペーパー（未定稿）に、  
大幅な加筆・修正を行い書き改めたものである。

